

令和5年度第4回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和6年3月29日（金） 午後3時～5時

■開催場所：職員会館かもがわ 3階 大多目的室

■議題：

- (1) 市民参加推進力指標について
- (2) 市民参加の裾野拡大ロジックモデルについて

■報告事項：

新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に係る新しい事業等

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員 10名

（荒木委員、乾委員、金田委員、篠原委員、白水委員、並木委員、原田委員、平田委員、三宅委員、森川委員）

■傍聴者：なし

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し、後日、音声配信を実施する。
Zoomを用いたWeb会議と併用開催した。

【議事内容】

1 開 会

2 議 題

議題（1） 市民参加推進力指標について

<森川座長>

- ・ それでは、早速議題に入る。「市民参加推進力指標について」事務局から説明をお願いする。

<事務局>

（資料1「市民参加推進力指標による市民参加推進計画の推進状況の把握について」説明）

<森川座長>

- ・ これまで、時間をかけて市民参加推進計画の進捗を測る指標について学びながら議論してきた。ただ、指標の完成度はあまり高いとは言えず、これで市民参加推進計画の進捗を測りきれぬのかという状況である。
- ・ それもそのはずで、本来は、第3期計画を策定する議論の中で、市民参加のプロセス等のロジックを組んでおくものであるが、今回は、後付けで作ろうとしているため、その位置づけが難しいのは当然である。

<乾副座長>

- ・ ロジックを意識しながら次の計画を策定していくと考えるのであれば、事務局から説明のあった経緯と位置づけで私は違和感はないと思う。

<原田委員>

- ・ 普段から、仕事でスタートアップ企業のロジックモデルの作成支援をしている。ロジックモデルを作成するのは分析が目的ではなく、目標に対してその施策が適切かどうかを整理するフレームワークであると思う。13の施策があって、それぞれが最終目標に達しているかという判断をするという意味では適していると思う。

<荒木委員>

- ・ 私も企業の経営支援を仕事の一部で行っている。その中で紹介したいと思ったのが、経営学系の中原淳先生の著書「サーベイフィードバック入門」である。中原先生が述べられているのは、対話が重要で、調査の後には対話をしてアクションプランにつなげる必要があるということである。市民参加推進力指標においても評価の後に、どのような関係者と対話し、アクションに結び付けていくのかということの問題提起したい。

<森川座長>

- ・ ロジックモデルを組み上げ、アクションを起こし、その結果のフィードバックを行うことで、その施策や事業を改善していくプロセスを作ることが重要であるということかと思う。
- ・ お二人にご指摘いただいた、市民参加推進計画の進捗管理において、この手法をどのように活用していけるかという視点は非常に重要だと感じた。

<並木委員>

- ・ ロジックモデルを作ることが分析ではないというのは、その通りである。重要なことは、向かうべき方向性とその手段が適切であるかということを整理することである。

- ・ 市民参加の推進においては、その施策により、市民や団体等に起きうる変化を事前に想定することから分析的な要素もあると考えており、ロジックモデルのアウトカムで示されるものと事前の想定を比較することで評価として使える部分もあるのではないかと考えている。
- ・ 荒木委員ご指摘の参加型の評価というのは、ミニマムでやるとすれば、京都市がロジックモデルに必要な数値を集め、それを第三者機関がレビューするというシンプルな方法になる。それに当フォーラムの委員や、事業の関係者も加わり議論することで、施策や事業が想定通りに動いてきたのか、より掘り下げて見ることができる。

<原田委員>

- ・ 今の議論を受けて、やはり資料4ページ目の「ロジックモデルで分析」という表現は語弊があるため、文言を変更した方が良いという印象を受けた。

<並木委員>

- ・ 原田委員のご指摘はそのとおりである。
- ・ 参加型の評価という意味では、その評価を誰と共有すれば、より効果的になるのかこの場で議論しても良い内容だと思う。全市民に見てもらい、自身で考えてもらうきっかけにできれば理想的だが、時間とコストがかかりすぎる。どこまで共有すれば次の計画に向けて議論が進むかと考えるとするならばいかがか。

<金田委員>

- ・ 参加、対話をしながら評価し、それをどのように活かすかという意味では、施策の中身によって参画いただくステークホルダーが変わってくると思う。
- ・ 市民参加推進計画のすべての施策がロジックモデルに当てはまるかという、評価しづらい施策もあると思う。一度評価してみる中で、この施策はロジックモデルでは評価しづらいということも見えてくると思う。

<乾副座長>

- ・ 現在の議論には2つのレイヤーの話が混ざっていると思う。計画レベルの大きな評価と、具体的な当事者のいる事業ごとの評価である。どのあたりのレイヤーで、このロジックモデルを使うかを整理する必要があると思う。

<森川座長>

- ・ 3月25日、勉強会として高校連携の授業の評価をロジックモデルで試してみたところである。そこで、事業レベルのものをベースにするとロジックモデルでの評価がやりやすいと感じたところである。

- ・ 今後の第4期計画策定に向けて、第3期計画という大きなレベルのものを総括・評価するにあたり、ロジックモデルを使った評価やその後の活用方法を考える必要がある。
- ・ 資料1の4ページに、今後の運用方針や位置づけについて記載されているが、その方向性で良いかは決定したい。方向性について異論はないか。

<乾副座長>

- ・ 「分析」という表現を変えるとというのも、実は難しいことである。「確認」や「関係性の把握」という表現で代替できるのではないか。

<並木委員>

- ・ 「評価」という表現でも良いと思う。「第3期計画においては、評価にロジックモデルを新たに取り入れる。」と記載するのが、一番すっきりするのではないか。
- ・ 市職員や当フォーラム委員を含めて、第3期計画を策定した当時のメンバーがほぼいない中で、違ったメンバーがその当時の計画策定がロジカルに考えられていたのかを評価し、さらにそれを活かして次期計画をロジカルに組み上げていくことは意味のあることだと思う。また、それがロジックモデルを用いた社会的インパクト評価の王道の使い方であるとも言うことができる。

<乾副座長>

- ・ 「評価」という言葉では、良いのか悪いのかという意味合いが感じられ、それが出すぎてしまうことにも留意する必要があるのではないか。

<森川座長>

- ・ 私の中では、第3期計画はいずれにしても評価する必要がある、そのプロセスに客観性と論理性を持たせるためにロジックモデルを使用するので、「評価」という表現で矛盾は無いと感じている。

<乾副座長>

- ・ 今ある全ての事業について、ロジックモデルで評価するという意味であれば、それでも問題ないと思うが、実際にはロジックモデルで評価するのが難しい施策もあるだろうと考えている中であれば、表現には気を付けるべきだと思う。

<森川座長>

- ・ 第3期計画の総括や評価において、ロジックモデルにウエイトを置きすぎるのは難しいと感じる。しかし客観性と論理性を持たせるためのツールとして参考に使うイメージで考えている。

<荒木委員>

- ・ どの表現を使うにしても、注釈を入れることで解消するのではないか。このロジックモデルを作成した目的を補足情報的に書いておけば問題ないと思う。

<原田委員>

- ・ 注釈を入れる方法で問題ないと思う。

<事務局>

- ・ 今後の方向性について認識違いはないということで、「分析」の表現は再検討する。

<森川座長>

- ・ 第3期計画を評価し、第4期計画を策定するに当たり、どこまでの参画者の声を拾えるのか、誰が関わると効果的なのかも含め検討する必要がある。当フォーラム委員だけで良いのか、さらに他の人にも話を聞く必要があるか。

<並木委員>

- ・ 先ほど金田委員からご意見があったとおり、施策によって話を聞く人の範囲は異なると思う。今この場で決める必要はないが、例えば、来年度も市民参加の裾野拡大で高校連携授業を実施することが決まっているのであれば、高校の先生方にフォーラム会議に来て意見を出してもらうなど、事務局とフォーラム委員以外が参加するロジックモデルでの議論がどのように深まるのかということを検証してみても良いのではないか。

<篠原副座長>

- ・ 13施策のうち、ロジックモデルの考え方を取り入れられるものから導入すると記載されているが、これ以外の施策に関する評価は、これまでの評価方法で行うのか。

<事務局>

- ・ そのように考えている。

<森川座長>

- ・ 評価にどのような人に参画してもらうかは、今後、検討していくことになる。

<乾副座長>

- ・ これまで市民公募委員サロンを実施してきた実績があるため、市民公募委員に関することは当フォーラムで評価できると思う。ただ、内容によっては、ここだけの評価が難しいものもあり、当事者性を考えれば、フォーラムだけで評価するものでもないと思う。

<白水委員>

- ・ 評価する際、視点が錯綜することはよくあることである。施策の実施側の視点か、参加者側の視点かという両輪になる。その意味では、関係者で対話しながら進めることが重要であり、関係者が増えるということは、一般の人でも扱いやすい指標や使いやすい評価シートを作るなどの工夫ができるのではないか。

<乾副座長>

- ・ 使いやすい評価シートというのが、つまりロジックモデルを作るということである。

<篠原副座長>

- ・ 京都奏和高校は、学校側で生徒にアンケートを常に行っているため、そのデータで分析できるかもしれない。

<乾副座長>

- ・ 京都奏和高校と西京高校で連携授業を行ったが、それぞれの目的に適したアンケート項目やロジックモデルを作成する必要があると思う。

議題（２）市民参加の裾野拡大ロジックモデルについて

<森川座長>

- ・ 次に、「市民参加の裾野拡大のロジックモデルについて」事務局から説明をお願いします。

<事務局>

（資料２「市民参加の裾野拡大のロジックモデル」説明）

<森川座長>

- ・ ロジックモデルの作成にご尽力いただいている並木委員から補足等お願いしたい。

<並木委員>

- ・ このロジックモデルは完成形ではなく、３月２５日に行った勉強会でフォーラム委員の皆様から出していただいた、起きうると考えられる変化について、その方向性とそれ以外で分類したものである。これからさらに、起きうる変化を追加していった上で、どのような取組がそのような変化につながったのかを検討していく。
- ・ 時間軸として、その変化が来年起こるのか、さらに時間がかかるものなのかということ、をフォーラム委員の皆様で合意していくというプロセスを辿ることになる。

- ・ 3月25日の勉強会を実施して良かったことは、この取組の対象である高校生にどんな変化が起ころうかということ話し合えたことである。その指標として、コミュニティ意識尺度を既存のアンケート表を使って測れるのではないかという話もできた。
- ・ また、松井委員から藤城学区で取り組まれている「地域留学」について話を伺う中で、子どものために実施した地域留学の取組を通じて、地域の大人側にも変化があったということも聞くことができた。同様に、高校生を対象とした市民参加の裾野拡大の取組が、それに関わる大人の市民参加にも影響を与えるのではないかというご意見をいただいたことが印象的だった。

<乾副座長>

- ・ 「コミュニティ意識尺度」は、まちづくり100人委員会にも関わっておられた石盛真徳先生が作成されたものである。どのようなロジックでこの尺度を作成されたのか、ぜひご覧いただくと理解が深まると思う。

<森川座長>

- ・ 京都奏和高校の授業に関わっておられた篠原副座長と白水委員に、どのような短期アウトカムを想定されていたのか、実際にはどのような変化があったのかお聞きしたい。

<白水委員>

- ・ 2年生のビジュテックの授業に関わった。自分だけでなく、どのように他者性を受け入れていくのかというプロセスを生徒自身が考える力を身に付けられるようにすることを重視して授業を設計した。
授業を設計する際、最終目標を設定しておくことも重要だと感じている。
- ・ 実際に授業を行うと、生徒はそのような力を身に付けることができていた。
- ・ 一つ疑問に感じているのは、今回の資料では時期を区切って評価されているが、その後の追跡調査での評価は行わないのか。

<篠原副座長>

- ・ 今回の資料2については、3年生の授業を取り上げてロジックモデルを組まれている。実際の授業では、「市民参加を推進する」という言葉は使っておらず、生徒自身は意識していないと思うが、今回の授業で高校生がまちの人の笑顔のために取り組んだことが、実はまちづくり活動や市民参加につながる行動だと考えており、このような行動ができるようになったことが高校生に起きた変化だと考えている。

<乾副座長>

- ・ 高校の総合的な探究学習の教育目標は、自己の生き方・あり方と不可分な実社会における課題を発見し、それを解決する能力を身につけることである。自分の将来の展望を見据えつつ、実社会・実生活の課題にも取り組めるようになって、社会に出ていくことが求められており、2019年の学習指導要領からは、このように学ぶことが示されている。
- ・ 高校の現場では、この目標をどのように授業に落とし込むか迷われているが、そのような中で、京都奏和高校では上手く授業に取り組まれていると思う。この授業を行っている先生方と対話することで、授業目標や目指す姿をロジックモデルにも落とし込めるのではないかと。

<篠原副座長>

- ・ 京都奏和高校の生徒は、実社会で上手く振舞うことが得意ではない子が多いので、この授業を通じて生徒の行動に変化が見られたことは、本当に市民参加の裾野拡大に結び付いていると思う。

<白水委員>

- ・ 市民参加や市政参加といったマクロな視点を持ちつつ、一方で自身の身近な人を考えてまちづくりに取り組むミクロな視点のどちらも持つことができるように授業を組み立てていくことが重要である。実際に、いきなり市民参加について考えましようとして投げかけても生徒にとっては想像がつかないところがあり、例えば身近な高齢者に話を聞くなどの導入を通じて、最終的に地に足のついた取組のアイデアが出てくるようになった。市民参加の裾野拡大を進めるために、その考え方の導入の組み立てを考える必要がある。

<森川座長>

- ・ 短期アウトカムとしては、どのような項目が一番当てはまるのか。

<乾副座長>

- ・ この議論に関しては質的評価になり、飽和化することが重要になる。そうすれば、評価における考え方の観点ができると思う。

<白水委員>

- ・ 生徒の変化にも様々なディテールがあると思うが、資料2の指標については、生徒自身ではなく、やはり外部の目線での評価の指標であると感じる。
- ・ また、生徒の変化にもかなり細かい段階があるのではないかと。

<乾副座長>

- ・ 段階別で考えるとすれば、「参加の梯子」のような感じのステップで、どこまで達しているかということが評価できると思う。

<並木委員>

- ・ どのように測るかという意味では、アンケートもあるが、手間を掛かけてインタビュー調査から定性的に測ることも可能である。段階論は、手間をかけることができれば、ルーブリック評価も可能である。総合的な探究の時間については、ルーブリック評価のテンプレートがあり、もしかすると先生方もそれを使用されているかもしれない。
- ・ 本日の議論を聞いて、コーディネーターや外部の講師を呼ぶことで、市民参加の裾野拡大がより効果的に進んだということを言うことができると思った。京都奏和高校と西京高校が特に力を入れて取り組んだことの有効性にフィーチャーできると良い。

<三宅委員>

- ・ 短期アウトカムに記載されている指標が、生徒の意識に関するものが多く、実際の行動の項目が無かったのが気になった。
- ・ また、選挙の投票率など数年後に成果が出る指標と、今すぐに測れる指標など時間軸に統一感がないのも違和感があった。

<乾副座長>

- ・ 高校生を対象とする市民参加の裾野拡大の議論においては、まちづくりの要素が強かったが、市政参加も重要であると考えている。普段、主権者教育にも携わっておられる三宅委員に、適切な指標のアイデアがあればお聞きしたい。

<三宅委員>

- ・ 高校生の主権者教育の取組では、まちづくりをベースに進めているため、すぐに思いつくものがないが、市民参加という意味では、町内のイベントに行くだけでも高校生ができる市民参加だということを伝えている。そのため、市民のコミュニティに参加するような行動が増えることなども指標になるのではないかな。

<白水委員>

- ・ 京都市ユースサービス協会の取組では、選挙前にそれぞれの候補者のマニフェストを置いており、それも市政参加への関心を高める1つであると思う。

<乾副座長>

- ・ 三宅委員の取組については、どのように選挙への関心が高まるかという指標を定めたいと、その取組の成果を測ることを考えてもらえば良いと思う。

<森川座長>

- ・ 来年度、高校連携の授業は、西京高校に限らず広く実施していこうという予定で間違いないか。

<事務局>

- ・ そのとおりである。また、本日の議論は、来年度の高校連携授業の前後で実施するアンケートの質問項目に反映していくことができると思う。

<乾副座長>

- ・ 西京高校は講師派遣の扱いになると思うが、京都奏和高校との連携は、具体的にはどのような取組になるのか。

<事務局>

- ・ 京都市が高校からの依頼に応じて、高校生が取り組むテーマに関連する本市の所属やネットワークのある団体にお繋ぎする役割を担う。

<乾副座長>

- ・ 京都奏和高校との連携のように、事務局や市民参加推進フォーラムが直接的に出向くわけではないような、連携内容が確定していない取組に関しては、ロジックモデルが組みにくい。

<事務局>

- ・ 来年度に拡大していく授業は、西京高校で今年度実施したようなパッケージ化されている授業である。京都奏和高校との連携については、同じやり方が他の高校でも効果的であると必ずしも言えず、オーダーメイド型としている。

<乾副座長>

- ・ オーダーメイド型が完全に高校の要望に応えるだけでは、京都市側の独自性がない。双方の目的と独自性を融合することで、ロジックを組んだ評価を行える可能性もあると思うことができると思う。
- ・ パッケージ型でもオーダーメイド型でもミニマムでこれは測るという項目があれば良いかもしれない。

<森川座長>

- ・ 本日の資料では、2つの高校の授業を一緒に書いているが、実際に評価するときには別々で行うのか。

<乾副座長>

- ・ 授業としてはそれぞれで行うが、高校生に対する裾野拡大という意味では1つの取組であるため、ロジックの枠は1つで行うことが可能なのではないか。逆に別々で評価することもできる。

<篠原副座長>

- ・ 京都奏和高校の取組は、事務局の負担が大きすぎる。確かに、生徒への効果は大きいですが、そのバランスも考える必要がある。
- ・ また、授業前にもアンケートを取るのであれば、高校は年度替わりの早い時期にアンケートを実施してしまう可能性が高いため、できるだけ早い段階で質問項目等を調整したほうが良いと思う。

<乾副座長>

- ・ スポット的な支援や、教員への支援という方法もあると思う。

<森川座長>

- ・ それでは来年度に向けて、事務局には引き続き検討をお願いする。

3 報告事項

報告事項（1）新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に関する新しい事業等

<事務局>

（資料3「新たに設置された附属機関等に係る協議結果（一覧）」、
資料4「市民参加に関する新しい事業や取組」報告）

<森川座長>

- ・ 本日の議論は以上となる。それでは、事務局にお返しする。

<事務局>

- ・ 最後に、今年度末で任期が終了となる委員から一言ずついただきたい。

<森川座長>

- ・ 市民参加推進力指標を扱うのは大変難しかった。以前の座長からお話を聞き、市民参加推進フォーラムは、京都市における審議会の模範となる運営を続けてきた。今後も、その方針を引き継ぎながら議論していただければと思う。ありがとうございました。

<篠原副座長>

- ・ 市民公募委員サロン等で貢献できたかと思う。市民参加や市政参加について考えることができたのは、私にとっても貴重な機会だった。ありがとうございました。

<金田委員>

- ・ 他の審議会と違い、しっかりと対話や議論ができ、開かれていて安心な場だと感じた。大学で仕事をしているため、学生の市民参加の推進も含めて、今後も何か関わることができればと思っている。ありがとうございました。

<原田委員>

- ・ 市民公募委員として初めて審議会というものに参加した。政策ができていくプロセスを理解することができ、大変学びになった。今後も他の分野に市民公募委員等に関わることができればと思っている。ありがとうございました。

4 閉会

<事務局>

以上をもって、市民参加推進フォーラム令和5年度第4回会議を終了する。本日はありがとうございました。

以上